



# アイデンティティ理論の再構築

津田, 翔太郎

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2020-03-25

(Date of Publication)

2022-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7636号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007636>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



# 論文内容の要旨

## アイデンティティ理論の再構築

津田 翔太郎

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

アイデンティティ理論の再構築

氏名：津田 翔太郎

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名	(主) 白鳥 義彦	教授
	(副) 酒井 朋子	准教授
	(副) 松田 毅	教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

エリック・H. エリクソンによって分析概念として確立された「アイデンティティ」概念は、自律的・一貫的・普遍的な<私らしさ>を理想とする概念であり、目指すべきパーソナリティとして様々な人々に広く受け入れられるとともに、広範な学問領域において研究・分析の対象とされてきた。

そのようなアイデンティティ概念は近年、構成主義、あるいはポストモダン/ポスト構造主義やマイノリティの人々を中心とした多様性を主張する実践の興隆などに伴い、「本質の無さ」が指摘されるようになってきた。

そして、わが国においては近年、消費をとおした自己呈示の顕在化、あるいは社会構造や他者関係の変容(=多元化の進展)に伴い、そのような構成主義的視座が発展的に解釈され、多元的アイデンティティ(複数的である<私らしさ>)に係る議論が盛んに展開されるようになった。その視座は、浅野智彦や辻大介らによる実証調査を伴った有効な分析・解釈枠組みとして捉えられる一方、構成性・多元性が過度に強調されることで、ある側面においては、行為者の心性を的確に把握することが困難となる。

アンソニー・エリオットおよび片桐雅隆による「新しい個人主義」の視座を参照し、わが国の今日的な社会構造・他者関係/行為者の心性を概観的に観ると、流動化が進展する中、時に自殺に至るほどの感情的コストの高まりが確認された。そのようなアイデンティティの内実を、アクセル・ホネット、薄井明らによる「承認」概念の枠組みに基づいて、①個人化の進展による職業集団を中心とした役割アイデンティティの弱体化、②関係性からの解き放ちの進展による他者承認の不安定化を鑑みて具体的に検討すると、「存在論的不安」の高まり、およびそれを解消するために心・脳・生物学的身体などの科学的/自己内在的言説をとおしてアイデンティティの統合性を志向する心性の台頭が確認された。さらにそのような心性は、大澤真幸による「他者性抜き他者」概念と接続され、一つの社会意識として捉えうることが示唆された。

次に、そのような多元的アイデンティティ論では説明しきれない心性の具体的な論述のために、ウルリッヒ・ベック、ギデンズ、リチャード・セネット、エリオット、ジグムント・バウマンらによる「現代社会学的アイデンティティ論」の視座を参照すると、①社会構造や他者関係の多元化、②一定の多元性に開かれながらもそれに回収されない緩やかな私らしさを可能とする前言語的な行為主体、③②の安定化を可能とする安住の地が損なわれたことによる存在論的不安の現出を想定することが確認された。しかし、緩やかな<私らしさ>を存立させる行為主体がどのような過程を経て自己構成を行うのか、②存在論的不安を解消するための統合的アイデンティティへの志向性の増大はなぜ一般的な行為者に共有されるのかといった問いについては、十分には明らかにならなかった。

この問いを明らかにするために、自己やアイデンティティを物語として捉える「自己物語論」を精査する中で、浅野による、「自己構成に先立つ語り手に起因する自己の変わりにくさ、あるいは、語る自己/語られる自己という視点の二重化によって生じる「自己の語りえなさ」に基づく自己の決定不可能性・変容可能性」に係る視座がその要点として析出された。

前者の自己構成に先立つ語り手について、ピエール・ブルデュエ、ニック・クロスリー、M. メルロ＝ポンティらによる「身体論」、杉浦健による「多元的循環自己」概念を参照し発展的に検討すると、アイデンティティは、「①身体に基づくすでに自己構成された語り手によって変わりにくい性質を帯同する。②語り手が外部の変化に馴染みにくく、また外部との相互行為・解釈の循環をとおして肯定的・安定的な自己物語を実感できない場合、行為者は存在論的不安を抱くこととなる。③その不安を低減する＝存在理由への再帰的な懐疑を遮断するために、社会や他者を経由せずに統合性を感じることができる心・脳・生物学的身体などの言説を参照した統合的アイデンティティを志向する」といった（原理的に多くの行為者が辿りうる）構成過程が確認された。

このような統合的アイデンティティは、根源的に不安定かつ他者などの外部を排除する傾向を伴うゆえに、具体的な他者との相互行為に基づいて<私らしさ>が実感される<統合的アイデンティティ>を志向することが望まれるものの、①それを可能とする創発的自我を自発的に創出できる行為者、②創発的自我を安定した軌道に乗せ<統合的アイデンティティ>が実感できる他者・社会構造の想定が難しいことから、一つの理念的なアイデンティティのあり方として位置づけられる。

また補足的な論点とはなるが、土井隆義による「外キャラ／内キャラ」概念を参照すると、多元的／統合的アイデンティティに係る志向性は、行為者間においておおよそ二極的に生じる場合もあれば、一人の行為者においてある程度両立する場合もあると考えられる。また統合的アイデンティティや内キャラは、身体に基づくすでに自己構成された語り手に基づく原理的な変わりにくさに理念的（近代的）アイデンティティが順機能的に作用するものの、それを可能とする他者・社会が不在であるために統合的・内在的な要素が（代替的に）強く志向されることによって構成されると考えられる。

これまで言及してきた理論枠組みに依拠し、①地方大手半導体メーカーにおける失職・転職活動（ドキュメンタリー番組）、および②大手広告代理店における過労自殺（被害者親族・担当弁護士による手記）を事例にアイデンティティの内実を分析すると、労働環境の流動化を原因／遠因として、「経験・記憶上の自己と今この私が解離し、アイデンティティの緩やかな統合性＝<私らしさ>の実感が損なわれる」という、「自己物語の解離」という心的困難が確認された。この困難は、自己責任言説の興隆および小さな物語の噴出という今日の状況によって独力では解消し難い状況にあると言え、理念的にその解消過程を検討する必要がある。これに当たっては、浅野や大澤による「自己の語りえなさ」概念が有効となる。自己の語りえなさは、相互行為上の他者や社会規範によって規定される側面があるとともに、①これまでの<私の総体>に内在し、他者の働きかけによって対象化されることで新しい自己（物語）・アイデンティティとなりうる、②これまでの<私の総体>と何らかの連続性を持ち、対象化が不可能であるからこそ共時的に自己・アイデンティティそのものを存立させうる性質を帯同するものとして捉えることができる。

この視座を踏まえると、他者・外部との相互作用によって、①自己の語りえなさに基づいた新しい自己物語を構成すること、あるいは②共時的な自己の語りえなさを自覚することで自己物語の解離に基づく困難性を乗り越えることが示唆される。しかし前述のとおり、流動化の進展による外部との関係性の遮断、自己責任言説の興隆、小さな物語の噴出によって、この過程の実現は難しい状況にあるゆえに、社会全体においてそれを可能とする仕組みを企図する必要があると考えられる。

それに当たっては、自己の語りえなさを語りえないまま承認しうる他者＝無知の好奇心・理解途

上への係留・固有性への対峙といった特性を有する異質な文脈に生きる他者が重要であり、そのような他者と、「ヴァルネラビリティ＝傷（つきやすさ）」の自覚・共感に基づいた相互的な承認関係を築いていく必要がある。その実現において行為者は、「特定の物語以外にも自己実現の可能性が開かれていること」を意識しつつ、傷（つきやすさ）に基づいた異質な他者との属性に囚われない相互承認を志向するべきと言える。

しかし今日においては、「つながり格差」と言われるように、アイデンティティ構成に重要な役割を果たす強い紐帯に基づく他者関係は、社会階層の別によって持つ者／持たざる者（＝社会的孤立者）に分断されている。従ってアイデンティティの困難性を解消するにあたっては、コミュニティカフェのような、日常生活の動線上にあり、多様な人々に開かれ、異質な他者との属性に捉われない持続的な相互承認の関係をとおして<私らしさ>に基づいたアイデンティティ（再）構成が可能となる場が必要と考えられる。

他方、今日のわが国においては、ひきこもり当事者のように、アイデンティティ構成・自己承認が極めて難しい人々が存在する。そのような人々においてはとりわけ、傷（つきやすさ）に対する明示的な自覚・共感、および就学・就労を前提とした支配的な物語の相対化といった外部条件を前提としつつ、上記同様、行為者自身が支配的な物語に回収されないアイデンティティ／異質な他者との相互行為・承認を志向することが求められる。

このような論点に依拠すると、傷（つきやすさ）に基づくアイデンティティ構成・自己承認は、ひきこもり当事者のような特殊なケースに限って実現可能・有効かのように思われるが、大澤らが傷（つきやすさ）に基づくマクロな他者連帯を示唆しているように、この概念は、流動化の進展、小さな物語の噴出、自己責任言説の前景化、あるいは関係性からの排除といった様々な分断に苛まれる今日的な社会状況を打破し、人々がつながりあう数少ない契機として捉えることが可能であり、我々は、その可能性をマクロな位相で検討していくことが求められると言える。

以上にとりまとめたとおり本論は、多元的アイデンティティ論によっては捉えきれなかったアイデンティティおよびその困難性の構成過程・解消可能性に係る理論的記述を一定の水準で達成することができたと考えられ、その点でアイデンティティ理論の再構築に寄与することができた。

以上

## 論文審査の結果の要旨

氏名	津田 翔太郎
論文題目	アイデンティティ理論の再構築

### 要 旨

アイデンティティは、エリック・H・エリクソンによって確立された分析概念であり、「自律的・一貫的・普遍的なく私らしさ」の生涯を通じた獲得を理想とする。この概念は「目指すべきパーソナリティ」として一般的な行為者に広く受け入れられるとともに、人文・社会科学を中心とした広範な学問領域において、その構成過程が分析の対象とされてきた。

一方、近年においてこうしたアイデンティティ概念は、構成主義やポストモダン／ポスト構造主義、あるいはマイノリティの人々を中心とした多様性を主張する実践の興隆に伴って、「本質の無さ」が指摘されるようになってきた。この新しい視座は、「パーソナリティはこうあるべき」という社会規範の脱構築に寄与したことから、近代的なアイデンティティという大きな物語に抑圧されてきた人々にとって、解放の契機につながっている。

またわが国においては近年、流動化・多元化の進展に見られる社会構造や他者関係の変容に伴って、そうした構成主義的視座が発展的に解釈され、複数的である「私らしさ」という意味での多元的アイデンティティに関わる議論が展開されてきている。その視座は、実証調査を伴った有効な分析枠組みとして捉えられる一方、構成性・多元性が過度に強調されるがゆえに、ある側面においては、行為者の心性を的確に把握することが困難になるとも考えられる。

本論文は、こうした問題関心に基づき、構成主義に基づく多元的アイデンティティ論の有用性を認めつつも、その理論的難点を指摘し、統合を志向する心性および「自己物語の解離」を含め、行為者の今日的なアイデンティティのあり方を包括的に捉えうる理論の構築を目指すとともに、その困難性を解消しうる視座の記述を行おうとするものである。

第0章「はじめに」では、本論文で論じられるべき課題と論文の構成が簡潔に示される。

第1章「アイデンティティ概念の歴史の変遷—構成性・多元性に着目して」では、まずエリクソンのアイデンティティ論および「近代的自己」概念に着目し、アイデンティティ概念の基本的な特徴が整理される。その上で、バーガー＝ルックマン、ジュディス・バトラーらに代表される、「自己やアイデンティティは言語によって構築される」という構成主義的自己観が台頭してくることが指摘される。さらにこの視座は、ポストモダンやポスト構造主義の思想的潮流と連動して、抽象的な水準におけるアイデンティティ多元論として広まったとされる。一方、「社会構造の流動化」という文脈の中では、多元的アイデンティティ論だけでは捉えきれない、統合的アイデンティティを志向する行為者の今日的な心性が生まれてきているという主張もなされ、以上のように、アイデンティティ概念の歴史的な変遷が整理される。

第2章「流動化の進展と統合的アイデンティティを希求する心性の前景化」では、アンソニー・エリオットおよび片桐雅隆による「新しい個人主義」の視座が参照され、わが国の今日的な社会構造・他者関係／行為者のアイデンティティの特徴が概観的に記述される。そして、そうした外部環境における行為者のアイデンティティの内実を記述するために、アクセル・ホネット、薄井明らによる「承認」概念が発展的に検討される。この枠組みに基づいて、その心性を、アンソニー・ギデンズによる「存在論的不安」概念、および大澤真幸による「他者性抜き他者」概念と接続し、統合的アイデンティティを希求する行為者の心性の特徴／その社会的要因について論じることが試みられる。

主査記載 氏名・印	白鳥 義彦
--------------	-------

第3章「現代社会学的アイデンティティ論の展開」では、ウルリッヒ・ベック、ギデンズ、リチャード・セネット、アンソニー・エリオット、ジグムント・バウマンらによる「現代社会学的アイデンティティ論」の視座が検討され、構成主義的・多元的アイデンティティ論の理論的難点、すなわち統合を希求する心性を的確に記述しうる理論の不在、を乗り越える糸口が模索される。緩やかなく私らしさを存立させる行為主体がどのような過程を経て自己構成を行うのか、また、存在論的不安を解消するための統合的アイデンティティへの志向性の増大はなぜ一般的な行為者に共有されるのか、といったことを明らかにするために、社会構造や他者関係の多元化／アイデンティティのある程度の多元化／緩やかな統合を希求する心性が、その要点として析出される。

第4章「自己物語論の発展的展開」では、前述の現代社会学的アイデンティティ論の知見を踏まえつつ、浅野らによる「自己物語論」を、ピエール・ブルデュエ、ニック・クロスリー、メルロ・ポンティらによる「身体論」、杉浦健による「多元的循環自己概念」、濱田雄介による「<統合的アイデンティティ>概念」を参照しながら発展的に検討することで、多元論／統合論の理論的分断の超克が試みられる。統合的アイデンティティは、根源的に不安定かつ他者などの外部を排除する傾向を伴うゆえに、それを可能とする「創発的自我」を自発的に創出できる行為者や、創発的自我を安定した軌道に乗せる<統合的アイデンティティ>が実感できる他者・社会構造を想定することが難しいために、一つの理念的なアイデンティティのあり方として位置づけられる。

第5章「今日的なアイデンティティの困難性および自己の語りえなさによるアイデンティティの(再)構成について」では、前章で提示された理論枠組みに依拠して、労働環境の流動化を背景とした自己物語の解離について、近年の日本で見られる具体的な事例をもとに、その心性が分析される。さらに、このようなアイデンティティの困難性を解消する糸口として、自己物語論の文脈における「自己の語りえなさ」概念が着目され、大澤の「否定性」概念との接続を試みつつ発展的に検討することで、その可能性が示される。

第6章「アイデンティティの困難性を解消しうる社会について」では、これまでの議論を踏まえつつ、「異質な他者」、「傷つきやすさ」、「弱い紐帯」といった概念を手掛かりとして、上述のようなアイデンティティの困難を抱えた行為者、あるいは、他者との相互行為が極めて困難とされる「ひきこもり」当事者のような人々を承認しうる他者・社会のあり方についての検討がなされる。

第7章「終わりに」では、本論文で得られた知見と成果が示される。

本論文は、アイデンティティという、人文・社会科学の中でこれまでも多く論じられてきた概念を正面から取り上げ、様々な先行研究を踏まえつつ、それらの限界も指摘しながら、独自の観点を打ち立てようとする意欲的な論文である。また、理論的な考究を土台としながらも、現代の日本における具体的な社会的問題への言及も試みられており、そうした面からも幅広い視点を有したものであると評価できる。本研究を出発点に、今後アイデンティティをめぐる新たな議論が展開されることが期待できる。

以上に鑑み、本審査委員会は、論文提出者 津田翔太郎が博士(文学)の学位を授与されるに足る資質を有すると判断した。

### 審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	白鳥 義彦	副査	准教授	酒井 朋子
副査	教授	平井 晶子	副査	神戸学院 大学・教授	岡崎 宏樹
副査	准教授	佐々木 祐			